

アジア人財資金構想事業対応日本語コース報告

—— コース立ち上げ期のカリキュラム編成について ——

俵 山 雄 司

要 旨

群馬大学留学生センターでは、アジア人財資金構想事業「先進・高度ものづくりリーダー育成」プログラムの採択を受けて、桐生キャンパスに平成19年10月アジア人財資金構想プログラム対応日本語コースを開講した。本稿では、まず、平成19年度のアジア人財資金構想プログラムへの留学生の採用状況について触れた後、本コースのカリキュラムについて、編成の方針と実際のデザイン、従来の研修日本語コースとの関連について詳細を述べる。また、本コースの学生の評価の方法について説明し、最後に今後の課題とその対策について述べる。

【キーワード】 アジア人財資金構想 カリキュラム 日本語補講コース 評価

1. はじめに

留学生、特に留学生の大部分を占めるアジア諸国からの留学生に日本企業への就職を望むものは多い。しかし、日本企業はこれまで、仕事の進め方の違いや定着率の低さなどさまざまな理由があったにせよ(cf. 財団法人海外技術者研修協会2007)、留学生の採用には消極的であった。アジア各地の若く優秀な人材の視線が日本より欧米に向けられているのは、この日本企業の姿勢と無関係ではないだろう。一方で、世界的な経済のグローバル化の中で、日本企業のアジア進出の増加により、日本と現地の架け橋となる人材の需要は急激に高まっている。

この日本で就職する希望を持つ留学生と、アジアで活躍できる優秀な人材を確保したい企業との仲立ちをする目的で、経済産業省と文部科学省のもと平成19年度から始まったのがアジア人財資金構想事業である。

この事業には、海外から新たにリクルートしてきた学生を対象とする高度専門留学生育成事業と、すでに日本の大学・大学院に在籍している学生を対象とした高度実践留学生育成事業の2タイプがある。群馬大学が提案し採択されたのは、前者の高度専門留学生育成事業にあたる。これは、大学と企業群が産学連携のコンソーシアム（共同体）を形成し、企業のニーズに応じた専門教育・ビジネス日

本語教育・日本ビジネス教育などのプログラムを開発し実施することで、企業の求める高度な人材を育成することを目的としている。

各コンソーシアムは、それぞれの特性や地域性を生かしたプログラムを提案しているが、群馬大学では、工学研究科・工学部のある桐生キャンパスを中心に、群馬地域の地場産業や自動車部品関連企業と連携し「先進・高度ものづくりリーダー育成」プログラムを行うことになっている。

本報告では、アジア人財資金構想（以下、アジア人財）の採択に応じて桐生キャンパスに開設されたアジア人財プログラム対応日本語コースについて、その立ち上げ期（平成19年後期）における、学生の採用状況やカリキュラム編成、学生の評価、そして今後の課題について報告する。

2. 平成19年度のアジア人財留学生の採用状況

アジア人財の学生として選ばれた留学生は、文部科学省の国費奨学金を支給され、コンソーシアムがアジア人財用に用意した2年間のプログラムを修了した後、日本企業へと巣立っていくことが求められる。この留学生は原則的に各コンソーシアムが海外に出向くなどして探し選抜することになる。しかし、平成19年度は事業の開始年度であり、採択が決定した7月から開始となる10月までに新規の学生を選抜することが実質的に無理であった。そのため、すでに今年度工学研究科・工学部に在籍している学生の中で本事業の趣旨に見合った学生5名を第一期のアジア人財の学生として採用した。学生の学年・専門・国籍は以下の通りである。

博士2年 生産工学専攻（ベトナム）

修士1年 情報工学専攻（中国）、情報工学専攻（中国）、電気電子工学専攻（中国）

学部3年 機械システム工学科（ベトナム）

学年を見てもらうとわかるように、これらの学生はプログラム開始の平成19年10月から1年半後に卒業となる。この1年半という期間は、年度途中で事業が採択されたことによるものであり、平成20年4月採用の第二期の学生からはすべて2年間となる。つまり、第一期生は、以降の学生より半年短い期間でアジア人財のプログラムを消化しなければならないのである。群馬大学のプログラムでは、採用学生に2年間で270時間のビジネス日本語研修を提供することになっており、これは第一期生も例外ではない。その意味で第一期の学生は特に時間的な制約が厳しいといえる。

3. カリキュラム編成

3.1 カリキュラム編成の方針

アジア人財対応の日本語コースは、専門教育や日本ビジネス教育に先駆けて、10月から開始される

ことになっていたため、9月にカリキュラムの編成やコース運営方針について留学生センターの担当者間で打ち合わせが行われた。アジア人財対応コース開設に当たってはいくつかの懸案事項があった。

- ①学生の日本語レベルに隔たりがあり、5名のアジア人財の学生を1つのクラスに集めたかたちで授業をすることは難しい。
- ②アジア人財用に海外技術者研修協会（AOTS）共通カリキュラムマネジメントセンターから提供された日本語教材は、日本語能力試験1級（一部は2級も可）取得程度の日本語レベルを必要とするものであったが、現時点では全員がその基準に達しているわけではない。
- ③また、上記の日本語教材は、プロジェクトワーク型の活動によって構成されており、ペアあるいはグループでのやりとりが含まれている。したがって、5人前後の人数では、活動を進めにくくなるケースが想定される。

上記の3つの問題をスムーズに処理するために、以下の方針のもとでカリキュラム編成を行うことが担当者間で確認された。

- ①アジア人財対応コースは、2級以上の学生を対象とした科目群から構成される。アジア人財の学生には、日本語レベル診断テストを受けてもらい、そこで2級以上の実力があると判断された場合に受講を認める。一方、2級に満たないと判定された学生は、桐生キャンパスで以前から開講されている研修日本語コース（初級・中級向け）を受講してもらい、アジア人財対応コースを受講可能なレベルに向けて日本語力を引き上げていく。
- ②AOTS共通カリキュラムマネジメントセンター提供の教材は、学生の日本語力の伸びに応じて、順次導入していく。
- ③アジア人財の以外の留学生もアジア人財対応コースに受け入れ、ペアやグループでのやりとりの機会を保障する。

なお、日本語力診断テストは、アジア人財対応コースと研修日本語コースの受講を希望した学生すべてに受けしてもらい、この成績をレベル判定の資料とした。テストはA・Bの2種類用意し、学生の判断で選択させた。なお、テスト受験途中でA・B間の変更も可とした。テストの内容について以下に示す。

- テストA…初級で習得されているべき文法を4肢選択で問う問題と簡単な作文課題からなる。初級と中級の弁別、また初級内部での日本語習得段階の判断を行うためのもの。
- テストB…4肢選択の問題からなる漢字・語彙パートと文法パート、そして与えられたテーマに基づきエッセイを書く作文パートからなる。中級と上級（ここでは日本語能力試験2級合格相当）を弁別するもの。

テストは10月第1週と第2週の計2回行った。合計の受験者は43名であった。このうち、上級と判断された13名（アジア人財の学生2名を含む）に、アジア人財対応コースの受講を認めることにした。

3.2 アジア人財対応コースのカリキュラム

アジア人財資金構想が育成を目指す人材には、日本企業で専門知識を生かしながら活躍できるだけのビジネス日本語の力と、日本のビジネス慣習に対する知識と理解が求められる。この人物像のうち、ビジネス日本語力の養成の部分を担当するのが、アジア人財対応日本語コースである。ビジネス場面で自らの専門知識を生かして仕事を遂行するためには、話す・書く・聞く・読むの4技能のすべてがいわゆる上級の域に達していないと厳しいといわざるを得ない。そこで、それぞれの技能において目指すことを明確に提示するため、クラスは技能別の編成とした。

一方で、話すことには多面的な側面がある。独話的な性質を持つプレゼンテーションやスピーチと、対話にカテゴライズされる社外・社内の人との口頭でのやり取りとでは、使用される表現やストラテジーに違いがあることは言うまでもない。そのため、この両者を別々の授業で取り扱い、より焦点を絞った学習ができるように配慮した。

このような考えのもとで、アジア人財対応コースの中に5つの科目が設置された。表1にそれぞれのクラスの目的・内容を簡単に示す（授業名の箇所の括弧内の数字は週当たりのコマ数を表す）。

表1 平成19年度後期アジア人財対応日本語コース（上級）科目一覧

授業名	目的・内容
ビジネス会話 (1)	ビジネス場面における基本的なマナーや必要な話し方を学んだうえで、相手に伝わる話し方を練習する。また、自分の話し方を知ることも目的とする。教授項目は場面中心・パフォーマンス中心である。主な教材：『ビジネス会話 Drills』（ユニコム）、『ビジネス日本語 ①内定者編』（日本映像教育社）など
ビジネスライティング (1)	大学の授業で必要となるレポートなどの論理的な文章の形式的な規則や構成についての知識を身につける。また、それを通してビジネス文章を書くときに必要となる「読み手に配慮した」書き方を学ぶ。主な教材：自作プリント
ビジネスプレゼンテーション (1)	レジュメやパワーポイントを使った、わかりやすく効果的なプレゼンテーションの技法、また、そういった場面で鍵となる表現を学ぶ。また、資料を読解したり、話し合いをしたりする過程において、自ら問題を探り出しテーマを設定する力を養成する。主な教材：『トピックによる日本語総合演習上級』（スリーエーネットワーク）、AOTS 提供教材
ビジネスリーディング (1)	大学の授業や社会一般で必要となる文章を読み解く力をつける。具体的には、キーワードを探す、筆者の主張を探す、大意を要約するなどの技術に習熟することを目指す。また、日本企業や仕事をテーマに書かれた文章を読んで、それらについて理解を深める。主な教材：『留学生のための時代を読み解く上級日本語』（スリーエーネットワーク）、生教材など
ビジネスリスニング (1)	日本における社会生活に十分な日本語の聴解能力の養成を目標としている。特に、高度な聴解能力の育成、つまり、様々な場面における日本人の生の発話をビジネス文化、日本文化背景も含め、正しく聞き取り、発話意図を理解することを目的としている。主な教材：『プロジェクト X』DVD、『BJT ビジネス日本語能力テスト公式ガイド』（JETRO）

表1をみてわかるように、すべての科目は週1回開講されるものであるが、ここに至るまでには紆余曲折があった。当初ビジネスプレゼンテーションは週2コマ（火曜と金曜）として設定したのだが、学部・大学院の授業やゼミ・実験の関係で、一方の授業（火曜日）にしか参加できない学生が受講学生の半分以上いたということが開講後に判明した。

担当教師間で対応を協議した結果、受講人数が多い火曜日の授業をそのままビジネスプレゼンテーションとして行い、もう一方はビジネスリーディングという別個の授業として走らせていくこととなった。変更之际に混乱も予想されたが、当初金曜の授業ではプレゼンテーションの内容に関する共通資料の読解を行っていたこと、金曜日の参加者全員（3名）が火曜日のプレゼンテーションの授業に参加可能であったことが幸いし、移行はスムーズに行われた。

なお、上記の科目はすべて原則的に半期（15週）で一区切りとなる。これはアジア人財採用学生の入学時期に関係している。平成20年度に群馬大学はアジア人財の留学生として、4月に3名、10月に2名の採用を予定している。前学期に行った同名の授業の履修を前提として授業プランを組んだ場合、新たに採用されて入学してきた学生が授業に適応するのに困難を覚える可能性が高いことになる。このような理由で、各科目は原則的に半期で一区切りをつけることになったわけである。

3.3 従来の桐生キャンパス研修日本語コースとの関係

先にも述べたように桐生キャンパスでは、以前から研修日本語コースを開設している。このクラスは、工学研究科・工学部所属の日本語学習を希望する学部生・大学院生・研究生を受け入れている。アジア人財採択前の平成19年度前期は表2のような科目が設置されていた。

表2 平成19年度前期桐生キャンパス研修日本語コース科目一覧

授業名	内容・教材など
中上級 (1)	『現代日本語コース中級Ⅰ・Ⅱ』や生教材を使用し、ディスカッションなど高度な要求に堪える日本語力を養う
中級 (1)	『J Bridge』を使用し、総合的な会話力・語彙力・読解力の向上を目指す
初級3 (1)	『みんなの日本語初級Ⅱ』の前半を学習する
初級2 (2)	『みんなの日本語初級Ⅰ』の後半を学習する
初級1 (2)	『みんなの日本語初級Ⅰ』の前半を学習する

前期における問題として、まず、上級レベルの学生の能力に見合ったクラスがないということがあつた。では、日本語の授業を受けたい上級の学生はどうしていたのかというと、一部は中上級クラスに参加していた。しかし、このことによって中上級クラスは、必然的に学生の能力やニーズがバラバラになってしまい、授業の焦点を絞ることができず、効率的な学習の支障となっていることがあつた。

アジア人財コースはレベル的にはちょうど上級レベルにあたるため、中級以上の力がある学生はこちらを受講することで、自分の能力に見合った授業を受けられることになる。また、そうすることで、中上級や中級も受講学生のレベルが揃い、円滑な授業運営が可能となるという効果も期待された。このようなことも、アジア人財以外の学生もアジア人財対応のクラスに受け入れることを後押しした。

また、前期のもう一つの問題として、全体的にコマ数が少ないため、自習を積極的に行い、日常生活の中で習い覚えたことを実践するような学生以外は、文法や語彙の定着が難しく、また、なかなか訥々とした話し方から脱却できないということがあった。

一方で、アジア人財採用学生のうち、レベル判定テストで上級以外と判定された学生は、初級や中級のクラスに参加して日本語を学習することになる。そのため、初級・中級科目の量的な面での増強も望まれた。

以上に述べた、上級クラス設置と初級・中級科目の増強の必要性を考慮して、平成19年度後期の桐生キャンパス研修日本語コースには表3の科目群が設置されることとなった。(括弧内の数字は週当たりのコマ数をあらわす)

表3 平成19年度後期桐生キャンパス研修日本語コース科目一覧

レベル	科目名
上級	上級会話 (1)、上級作文 (1)、上級総合 (1)、上級聴解 (1)、上級読解 (1)
中級	中級総合 (2)、中級応用 (1)
初級	初級4 (2)、初級4作文 (1)
	初級3 (2)、初級3作文 (1)
	初級2 (2)
	初級1 (2)
	漢字 (1)

上級の科目群はすべてアジア人財対応の科目と兼用となっている。科目名の表示は「ビジネス○○」とはせず、「上級○○」とした。これは、学生への告知に際して変更したもので、初級・中級の上位レベルのクラスであることを一目でわかるようにし、混乱を防ぐための処置である。ただし、各授業では初回にこのクラスが「アジア人財」対応で、ビジネス場面を想定した日本語の習得を目的としたものであることを学生に明確に示している。なお、ビジネスプレゼンテーションに関しては、授業内でのプレゼンテーション以外の活動（読解やアンケート作成）の比重も少なくないことを勘案して、「総合」という名前を用いた。

中級の科目群に関しては総合と応用の2科目を置いた。前者は『日本語J301』をメインの教材にして読解中心で中級に必要なとされる文型や語彙を学ぶクラスとし、後者は主に聞く・話すの実践力を養成するクラスとした。

初級の科目群はレベルによって4つのカテゴリーに分け、それぞれで『みんなの日本語』12～13課分を学ぶこととした。初級のクラスの参加者は、大学院博士課程の学生がほとんどで、勉強・研究で日本語が必要とされる場面はそれほど多くない。そのため、初級のクラスでは日常会話で必要とされる基礎的な文型・語彙を使えるようになることを目的とした。また、初級後半の3・4レベルでは、主に書く活動によって学習事項の定着を図る「作文」の授業を併設した。さらに、レベル別のクラスとは別立てで、非漢字圏の国出身の学生向けに基本漢字を学ぶクラスを設置した。

このように、後期はアジア人財対応コースを上級のクラス兼用として置き、初級・中級においても科目数を増やした。その結果、全体の科目数は前期の8から19へと大幅に増え、学生のもつニーズにより細かく対応できる体制となった。

4. アジア人財学生の評価

このコース内のすべてのクラスは単位なしの補講扱いとなっているため、学生に対して大学としての公式な成績評価が行われることはない。もちろん、各クラス内で学習の成果を測る小テスト、中間テスト、期末テストなどが任意で行われ、それによって学生は自らの日本語習得度を確認することになる。ただ、アジア人財に関しては、学生の能力の伸びを図るための手段として、以下の3種の評価ツールがAOTS 共通カリキュラムマネジメントセンターによって提供されている。なお、このツールによって行った評価の結果は、事業の進捗・達成度の評価材料として経産省に報告が義務付けられている。

① BJT 個別テスト

日本貿易振興会 (JETRO) が実施している BJT テストの簡易版。本来のテスト (120分) より短い 90分となっている。ビジネス場面における聴解、読解、聴読解の能力を測定する。アジア人財の学生は、2年間のプログラム終了時に J 1 レベル (幅広いビジネス場面で日本語による適切なコミュニケーション能力がある) に到達していることが望ましいとされている。

② Can Do Statement

学生が、日本語を用いて「何ができるようになったか」を評価する。基準となる項目は、話す・書く・聞く・読むの技能ごとに分かれており、各技能には下位項目としてさらにいくつかの小項目が含まれている。各項目は5段階評価で、学生自身による評価と教師による評価の2つが行われる。(初回の評価は学生自身によるもののみ)。当然そこで学生と教師の評価に食い違いが出る可能性があるが、その食い違いについて両者がじっくり話し合うことで、学生の自己評価の能力を高めるといふ狙いもある。

③ 態度変容チェックリスト

ビジネス場面で遭遇する可能性のある場面において発揮されることが期待される行動能力を評価する。企業における日本人向けの研修などで使用されるリストを応用したものである。各項目は5段階評価で、学生自身による評価と教師による評価の2つが行われる（初回の評価は学生自身によるもののみ）。Can Do Statementと同様に、学生の自己評価の能力を高めるという狙いもある。

上記の3種の評価は、2年間のプログラムにおいて3度（初期・中間・最終）行われることになっている。第一期学生の初期評価は、11月上旬から中旬にかけて行った。コースが始まった10月第2週から2ヶ月近く経過した時点での実施であるが、これは共通カリキュラムマネジメントセンターからの評価ツールのリリースが10月下旬であったことによるものである。

5. 課題と対策

本報告執筆時点ではまだ最初の学期は終了していないが、現時点で明らかになった課題をまとめておく。

第一は、3.2節で述べたクラスの開講時間の問題である。桐生キャンパスの学生はすべて工学研究科・工学部所属の学生であり、その中には実験系の研究を行っているものも多い。実験には、ほぼ毎週決められた時間で定期的に行っているものと、不定期で集中的に行われるものが存在する。また各回の時間もまちまちで午後から深夜まで実験が続くこともあるということである。

今学期も、アジア人財の学生ができるだけ多くの日本語クラスに参加できるよう、時間割を組むまえに、授業一覧から各学生の空き時間を割り出し、そこに日本語の授業を入れていった。しかし、実験やゼミなどの時間を想定していなかったため、アジア人財対応として開講したクラスに、当のアジア人財の学生が必ずしも出席できないという事態が生まれた。来期は学期が始まる前に、指導教官を交えての相談の時間を設け、学生の空き時間をできるだけ正確に把握することが必要であろう。また、一方で、やむを得ずクラスを欠席した学生が、後で自習したり、内容を確認したりできる手立てを確保することも望まれる。

第二は、アジア人財対応コースに受け入れる学生の学年に関する問題である。AOTS 共通カリキュラムマネジメントセンターから提供された教材はテーマ別のプロジェクトワークを行うもので、各ユニットは内容的に他から独立して扱うことができるモジュール型の教材である。全部で15のユニットは「就職活動を知る」「日本と自国の違いを知る」「企業・社会を知る」「仕事を知る」のいずれかのフェーズに属し、他の2～3つのユニットと内容的にゆるやかにつながっている。

このうち「就職活動を知る」というのは、企業への就職活動を控えた学生には非常に有益な活動で、学生自身も強い動機をもって学習に取り組めると予想される。しかし、大学の学部1・2年生はまだ入学したばかりで、就職といってもなかなかイメージがしづらいかもしいない。また、就職活動をす

でに終えた学部4年生、修士2年生などにとっては、逆にあえて時間をかけてやる意味の見出しにくい内容となる。アジア人財採用学生以外を対応クラスに受け入れたため、今学期の授業参加者には、すでに就職活動を終えた学生が何名かいた。そのため、今学期は「就職活動を知る」というテーマの教材は採用しにくい状況だった。今後は、シラバスおよび初回の授業でテーマや内容の全体像を明確に示し、それを学びたい学生のみを受け入れたり、授業の中で就職活動を終えた学生をアドバイザー的な役回りでも活用したりするなどの対策が必要だと考えられる。

最後は、アジア人財採用学生のレベル差の問題である。学生の日本語レベルに差があるのは避けられないことであるが、第一期の学生に関しては、日本語能力試験1級程度の知識があり、話す・聞くの運用面も日常生活ではほぼ問題ない学生もいれば、まだ学習歴が半年で初級前半の内容を消化している最中の学生まで、相当な隔たりがあった。そのため、初級や中級前半の学生に対しては、ビジネス場面ですぐ使える表現・語彙よりも、そのベースとなる汎用性のある表現・語彙の指導を優先しなければならないということがあった。また、AOTS提供の教材や評価ツールは基本的に日本語レベルが上級の学生を想定しているため、それらが使用できない、または使用に困難を覚えることがしばしばだった。

この問題を解決するためには、まず企業側が留学生に対しどの程度の日本語レベルを期待しているかをニーズ調査によって明らかにする必要がある。そのうえで、プログラム全体としてどのような人材を育成するのかという具体的な目標を設定し、2年間270時間の学習によって、それに到達できる可能性のある学生を採用するという手続きが必要になる。このことを、ビジネス日本語教育担当からの意見として、アジア人財学生の採用担当者に伝える必要がある。また、専門教育・日本ビジネス教育担当者とは育成する人材の具体像について継続して話し合いを持つということをしていかなければならないだろう。

以上、アジア人財対応コースの第1期の開始後約3ヶ月経過した時点での課題を3点述べた。アジア人財の学生は、日本語の授業以外にも、大学の正規の授業、コンソーシアムで新たに設置する専門科目、日本ビジネス科目、インターンシップなど多くの授業・活動に参加する必要があり、日本語学習にかけられる時間はそれほど多くを期待できない。限られた時間をどのように使えば、ビジネス日本語力の向上に最大限の効果を発揮できるのかというのが、今後プログラムを行う中で常に追い求めていかなければならない命題である。

参考文献

財団法人海外技術者研修協会(2007)『平成18年度 構造変化に対応した雇用システムに関する調査研究(日本企業における外国人留学生の就業促進に関する調査研究) 報告書』

Japanese Course for Career Development Program for Foreign Students from Asia :

On the Design of the Curriculum at the beginning of the term

TAWARAYAMA Yuji

The center for International Studies, University of Gunma has introduced a Japanese course for Career Development Program for Foreign Students from Asia program at the Kiryu campus through a program called “Bringing-up an advanced and developed Monozukuri Leader.” In this paper, I refer to the acceptance of the students in 2007, and report on the course curriculum, including the policy of planning, actual design, and relationship with the Japanese Supplementary Course, which was offered earlier. Furthermore, I explain the method of evaluation, and describe some issues for consideration in future, along with measures for tackling them.

Keywords : Career Development Program for Foreign Students from Asia, curriculum, Japanese Supplementary Course, evaluation